

封

印

能村 研三

昭和萬葉集

この夏、我が家を大幅に改修することになった。長女夫婦との二世代住宅にし、耐震補強を施すためである。現在置いてあるものを一端空にしてから工事をする事になったので、物持ちの良い人にとっては大変なことである。特に書籍類の数は尋常でなく、父の書庫、私の書庫、沖の書庫と大きく三つあるものを整理した。そんな中に『昭和萬葉集』という一冊の本を見つけた。

これは講談社から昭和五十四年に刊行された本で、全二十巻・別巻一の「巻三」には、帯に「軍靴の響き 満州事変 昭和六年〜八年」とサブタイトルがつけられていた。

この本を開いてみると先師登四郎の歌が二首取められていた。

夏やけの杉の梢になく蟬の
にはかの黙し曇りそめたる

「装填」(昭和9・8)

曇りても川面かがやく復活祭
うねりつつ萩の若枝の丈のびて
軒端にちかく花もちにけり

「装填」(昭和9・9)

春嵐 朴 一 幹 の 響 き け り

この歌は登四郎、二十三歳の時に作った歌である。急性肺炎で伊豆の伊東に転地療養していた時期で、國學院大学を休学していた。

「能村登四郎年譜」を見ると、昭和六年の項に、「國學院の先輩牛尾三千夫にすすめられて釈道空の間接指導していた短歌同人誌『装填』の同人となる。同人中に広田栄太郎、鈴木棠三、近藤喜博、林翔などがいた」とある。

この「装填」という同人誌も古書の中から数冊が出てきた。発行者は広田栄太郎という国語学者で、黄色に変色した二十四ページの雑誌で登四郎の若い頃を知る本として貴重なものである。

『能村登四郎読本』には「私が短詩型文学の中で俳句を選んだことはやはり偶然なことではないのである。世界最小の詩型というものに、なんとなく魅力を感じたからである。うもし短歌をやっていたら深まるにつれて詩型の疑問や煩悶はもっと多かっただにちがいない」と記している。

片白草 封印 したる 一意 かな
十葉を刈るか刈らぬか計が来たり

木の家に息づきのあり更衣

能村 研三